

平城宮跡第 316 次発掘調査（第一次大極殿院西外郭）

現地説明会資料

2000年9月15日（金）

奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部

1. はじめに

朱雀門の真北、平城宮の中心に第一次大極殿院地区がある。ここには奈良時代前半には大極殿が存在し、後半になると大極殿は東方の第二次大極殿院地区へと移り、この地区は「西宮」となると考えられている。さらに都が平安京に移された平安時代初期には一時平城太上天皇の居所として利用されている。

今回の調査区は、第一次大極殿院西面回廊の西に隣接し、第一次大極殿と平城宮の西面北門（伊福部門）とを結ぶ、平城宮内の主要な軸線上に位置している。東西44m×南北28m、998㎡の範囲で設定した。北、西、東はそれぞれ既発掘の平城宮跡第92、177、295次調査区に接する。調査は2000年7月3日より調査を開始し、現在進行中である。

2. 歴史的環境と調査の目的

平城宮は奈良山丘陵の南辺に位置しており、2本の尾根が北から南へ延びている。各尾根上には主要な建物群が配され、尾根と尾根とを画する3本の谷

筋それぞれには、平城宮を南北に貫く基幹排水路が設けられている。今回の調査区は、このうち西の谷筋が通る場所にあっており、奈良時代には水流を堰き止めて平城宮内の大規模な園池である佐紀池が造られる。

調査区の北側では第92次調査で佐紀池の南岸が確認されており、そこから流れ出て平城宮を南北に縦断する基幹排水路SD 8195・3825（西大溝）が調査区中央部を通ることが予想された。この佐紀池と西大溝の様相、および第一次大極殿院西面回廊と西大溝との地形的な関係の解明が今回の調査の主な目的である。

3. 検出した遺構

検出した主な遺構には、南北溝2条、東西溝1条、池、東西棟建物1棟、南北塀1条、暗渠2条がある。以下、古代の遺構について、A～Dの4時期に分けてその変遷を説明し、次いで中心的な遺構である南北溝1について詳述する。

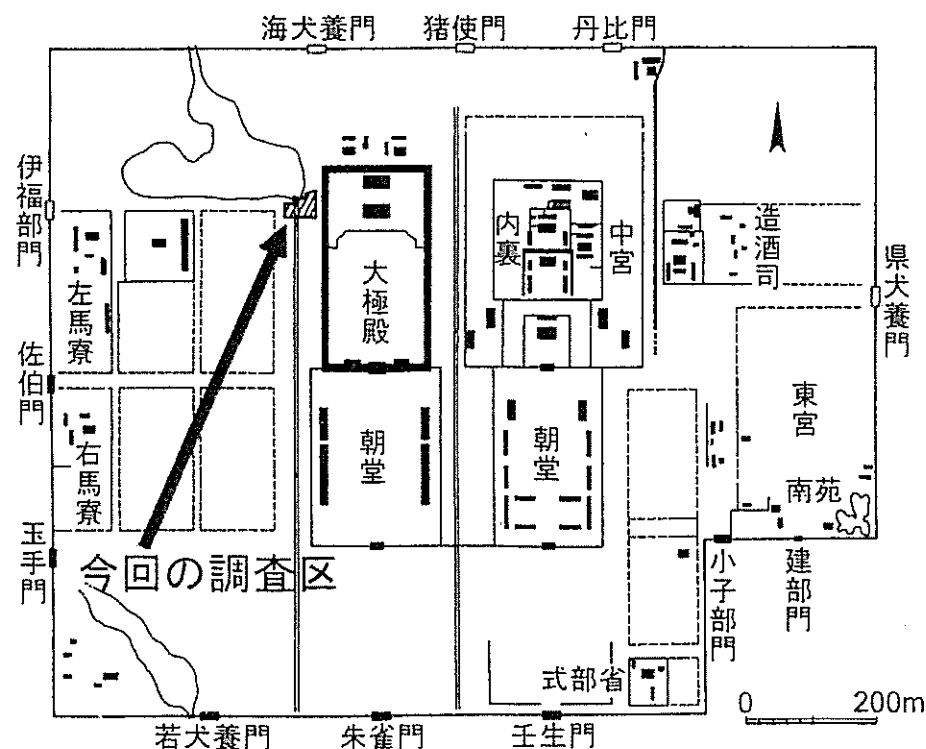


図1 調査区位置図

A期（平城宮造営当初） 第一次大極殿院西面回廊西側の低地に南北溝1を掘る。南北溝1の北には佐紀池に相当する小規模な池が造られていたか、あるいは池はまだなく谷筋の流れが延びていたものとみられる。

B期（奈良時代前半） 大規模な整地により、佐紀池の整備、南北溝1の一部付け替え、東西溝1の新設、を行う。この整地は調査区全面にわたって確認される。新設される東西溝1を境に、その北側で1m近くかさ上げされて佐紀池南岸の堤をなす。A期より1m程水面が高くなり、今日みる佐紀池の形状はこの工事によって定められたといえる。南北溝1はこの堤を切って掘り直され、池からの排水口には堰が設けられる。同時に東西溝1が新設され、南北溝1へ西から注ぎ込む。

整地土の最下面には、A期南北溝1の心付近より西側へ、おそらく調査区外に至るまで、3m以上の幅で瓦が敷き込まれている。溝の埋土および溝西側の地盤が軟弱だったため、整地のための基礎としたものであろう。この瓦は第一次大極殿院に用いられた奈良時代初期のもので、この整地工事が第一次大極殿院のなんらかの改修と関連して行われたことを暗示している。

B期の造成時期は、上記の敷き込み瓦に主として奈良時代初期の瓦が含まれること、東西溝1の最下層より神亀3年（726）の荷札木簡が出土していることから、奈良時代前半、養老末～神亀初（720年代前半）ころと考えられる。これは第101次調査において、佐紀池南岸の護岸整備を天平末年（748）よりも古い時期としていること、および、第177次調査において、この整地の年代を養老6年（722）ころと比定していることと大きく矛盾しない。

C期（奈良時代後半） 東西溝1を調査区西端で南に曲げて南北溝2とし、この屈曲部から南北溝1との合流点までを埋める。この南北溝2が、第315次調査区西端で検出した南北溝につながるものとみられる。南北溝2の東側には南北塀が造られる。

また、調査区東半部に大規模な整地を施し、基幹排水路のレベルから1mほど高められた壇状の平坦面を造成する。この壇上に平瓦の上に丸瓦を重ねた東西方向の暗渠1が造られる。遺構は残存していないが、その直上に南北に通る築地塀があったと考えられ、その築地塀の下を導水するためのものであろう。C期の造成時期は、東西溝1の埋土中の遺物、および暗渠1周辺の整地土から出た遺物の年代から、奈良時代後半と考えられる。

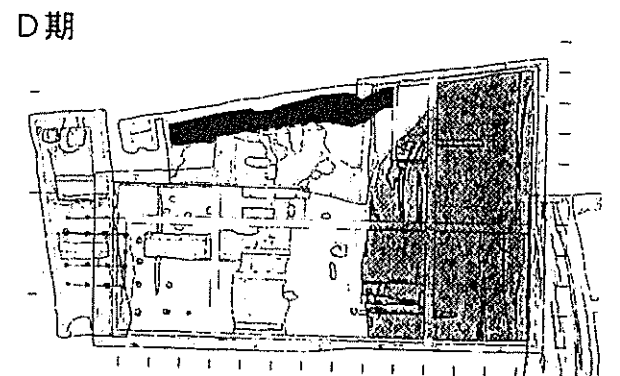
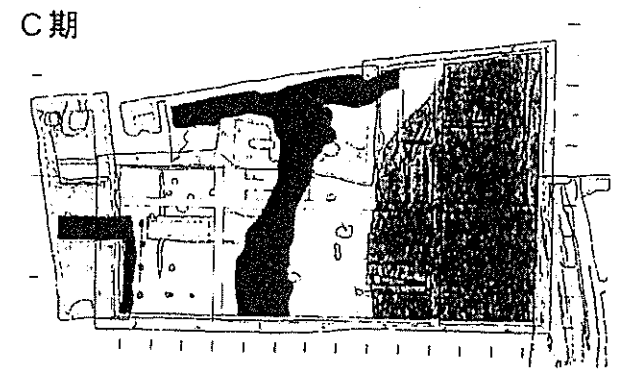
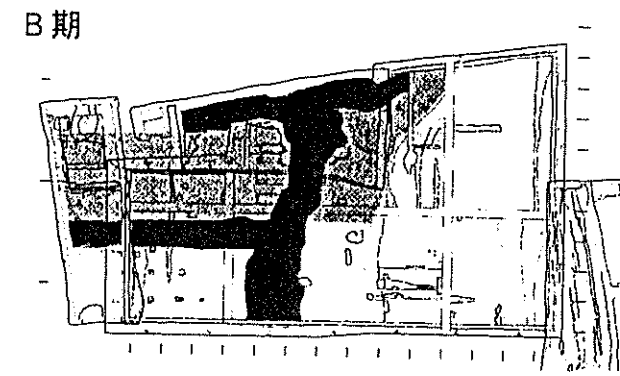
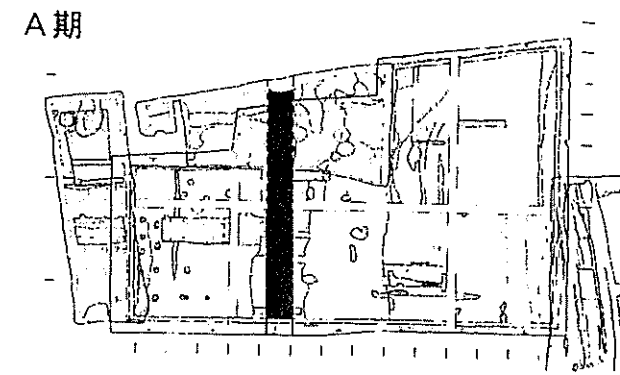


図2 遺構の変遷

D期(奈良時代末) 南北溝2を埋め、南北庇付き東西棟建物を建てる。今回検出した部分は、第177次調査で検出したSB12960の東妻柱列にあたる。桁行が4間以上で、柱間は桁行が7尺等間、梁行が身舎5尺等間、北庇5.5尺、南庇6.5尺である。南北溝1も南北溝2と同時期に埋められたと思われる。時期は奈良時代末以降であろう。

次に、中心的な遺構である南北溝1について、その変遷を整理しておく。

南北溝1 南北溝1は、平城遷都当初から奈良時代末まで存続した溝である。平城宮造営当初、奈良山丘陵の谷筋に沿って流れる水を誘導し、平城宮を南北に貫通する溝として造られた(図3のA)。この流れがB期の整地によって堰き止められ、佐紀池が本格的に築成されると、南北溝1は、この佐紀池からの排水と、佐紀池南岸の堤に沿って新設された東西溝1からの水を受けることになる。佐紀池からの排水部(図3のB)は、A期南北溝1に対して、1mほど底を上げ、かつ3m東に付け替えられている。底が上げられたのは、B期の整地によって佐紀池が整備されたことを裏付ける。この後、奈良時代後半には東西溝1が埋められるが、南北溝1はその後も存続し、奈良時代末に埋められる。

#### 4. 出土遺物

木製品 南北溝1より、糸巻き、人形、鋸歯状木製品が出土している。

金属製品 調査区東半部の整地土中より銚(こはぜ)が出土している。

土器 南北溝1および東西溝より奈良時代中ごろ以降の土器が大量に出土している。墨書土器としては、底部外面に「右兵粥塙」底部内面に「兵衛口[粥力]」と記されたもの、また「厨」、「大」などと記されたものがある。東西溝1からは二彩の椀が、南北溝1より転用硯やミニチュアの高杯が出土している。

瓦 奈良時代初期から末期にいたる各時期の瓦が出土している。とくにB期整地土最下部には、第一次大極殿院の改修に際して廃棄された瓦が大量に敷き込まれていた。軒瓦、丸、平瓦の他に面戸瓦もある。木簡 南北溝1から約10点(うち1点はA期)、東西溝1から約10点の、計約20点が出土している(主なものの釈文は別掲)。

#### 5. まとめ

今回の調査では、第一次大極殿院地区から西大溝にかけての地形の変遷、そして佐紀池と西大溝の様相を明らかにすることができた。まず第一次大極殿院地区から西大溝にかけての地形は、奈良時代前半は、西大溝から東へ緩やかに上がり、大極殿院西面回廊付近でさらに2m近く崖状に上がる。後半になると、西大溝の東15m付近で1m程度かさ上げされて壇を形成し、西宮の回廊付近でまた1m近く上がっている。この地区は奈良時代を通じて建物が極めて少なく、佐紀池の東南隅と西大溝および東西溝という、平城宮に流れ込む水流に関係する施設を中

心とする場所であった。奈良時代前半においては、第一次大極殿院を構成する一郭でありながら、その景観を際立たせるために意図的に空閑地としたのであろう。

次に、佐紀池の築成と、西大溝の改修過程においては、とりわけB期の佐紀池造成にともなう大工事が、第一次大極殿院の改造と関連性を持っていることに注目したい。このB期の始まりに相当する時期である神亀~天平初年(724-730ころ)、第一次大極殿院では南面回廊の一部を壊して東西の楼閣を新築し、その正面の景観を一変させている。佐紀池の造成工事がこの重要な工事と連関するものであったならば、第一次大極殿院西隣にあたるこの地区にも新たな意味が与えられたことになる。

ここで注目したいのが、「西池宮」の存在である。『続日本紀』天平10年(738)七月癸酉(7日)条に「天皇、大蔵省に御して相撲を覧る。晩頭に転じて西池宮に御す。」とあり、また万葉集巻八にも登場する。この宮は、名称からして西池(佐紀池と思われる)の存在を前提とする。天平10年にはすでに宮が存在するのであるから、このB期の造営は、佐紀池を造るにとどまらず、「西池宮」をも含む複合的な造営であったとみることができよう。

最後に、佐紀池の造成が平城宮造営当初に遡るかどうかについて触れておきたい。これまでの調査成果により、佐紀池は宮造営当初には造成されていたと考えられてきた。その根拠は、佐紀池東岸の段差が宮造営当初に造成されていること、および南岸において、宮造営当初の地盤面が池状に低くなってい

ることなどであった。しかし佐紀池東岸の段差は第一次大極殿院造成のためのものであること、また、第92次調査で検出されていた基幹排水路SD8195(西大溝。A期南北溝1の北延長部)はB期佐紀池の南堤よりも北へ延びており、かつ水位も1m以上低いことから、少なくとも宮造営当初の池はB期佐紀池よりはかなり規模の小さいものであったといえる。さらに今回の成果を加味するならば、本格的な園池の体裁をなすのはB期からであり、宮造営当初のA期には池が存在しなかった可能性も指摘できる。

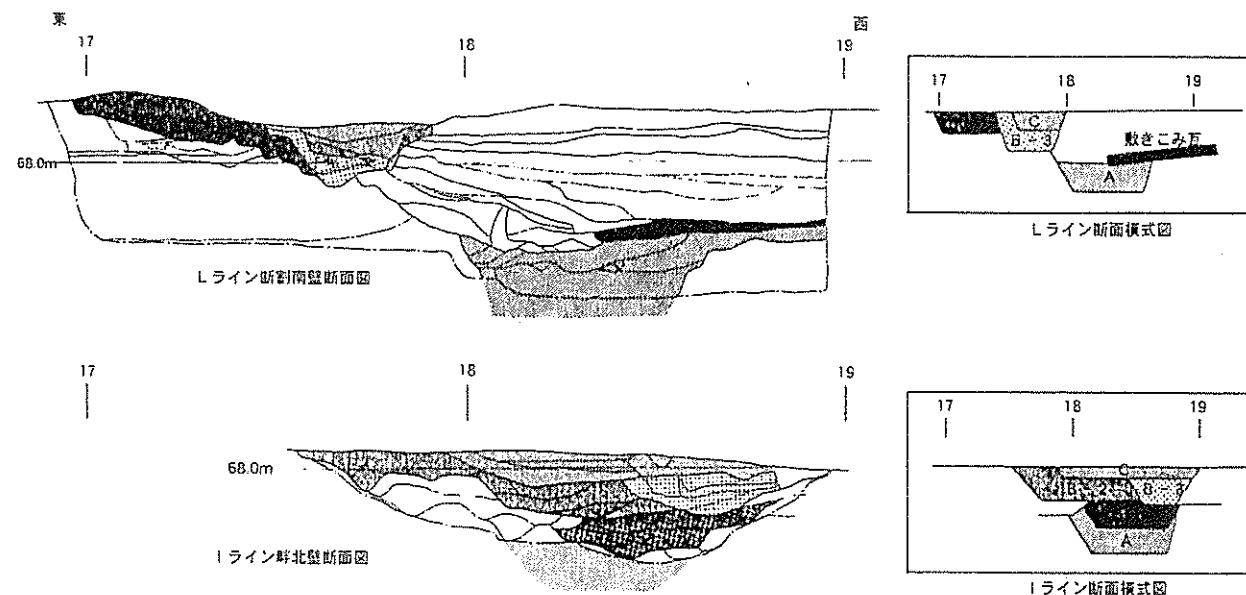


図3 南北溝1断面図および模式図

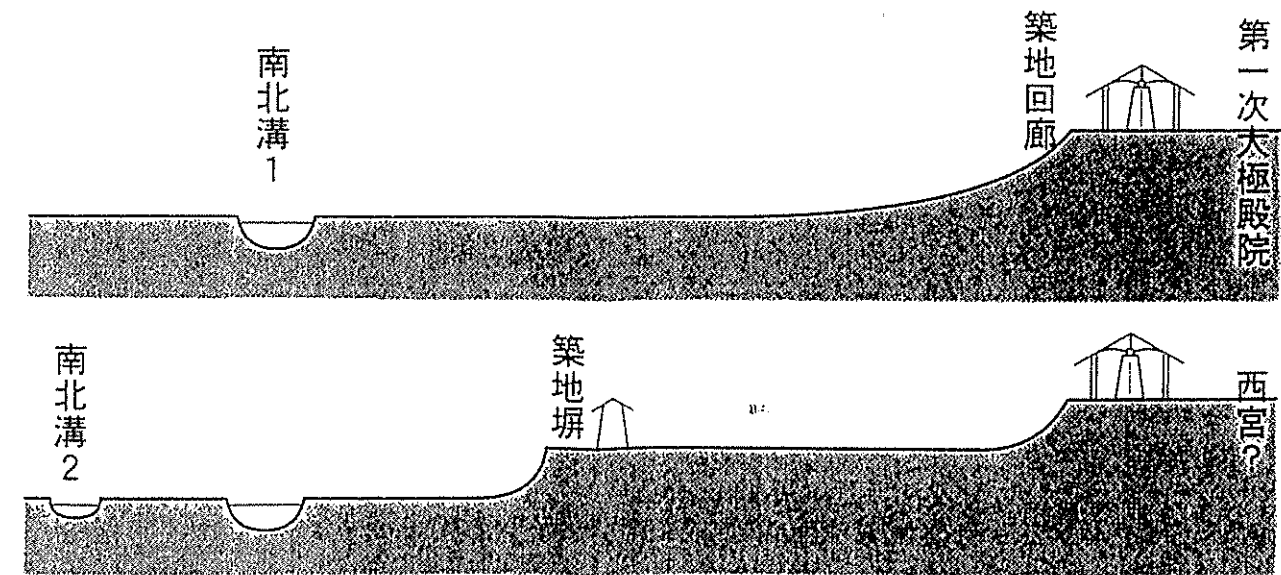


図4 第一次大極殿院地区から西大溝(南北溝1)までの地形模式図  
上: 奈良時代前半  
下: 奈良時代後半



